

## 歴史に学ぶ

牧野 直子

### コロナ禍で変わったライフスタイル

新型コロナウイルスが蔓延しはじめて3年。次々と新たな変異株の出現で先が見えない状況が続いています。2年前の結通信の巻頭文で「コロナ禍から見てきた安倍政権の迷走」と政権批判をしましたが、その安倍元総理の国葬という事態になるとは思いもしていませんでした。

コロナウイルスの出現は社会のコミュニケーションの在り方を大きく変えました。通勤せずにリモートでの仕事やショッピング。直接顔を合わさなくてもできることで経費の節減にもなっています。またスマホの普及でアプリやSNSによる情報のやり取りが一般的になってきています。しかし、一方では一人暮らしの高齢者が増え、人との会話が減り、孤独と体力の低下で介護が必要な方がどんどん増えているのも事実です。少子高齢化とコロナ禍と気候変動私たちの前に大きな問題が横たわっています。

### 長引くロシアによるウクライナ侵攻

そしてロシアのウクライナ侵攻も予想通り半年を越えた長期戦になり、街が次々破壊され、犠牲者がどんどん増えています。また国連のNPT(核拡散防止条約)の会議は決裂、今後の核戦争への懸念を深める結果となりました。

なぜこういうことになったのか、私たちは歴史を振り返り、広島と長崎の平和公園に刻まれた「二度とあやまちは繰り返しません」という言葉を再度思い起こし、そのために何をすべきかを真剣に考える時が来たと思います。

### 中村 哲さんが目指したものは

世界ではあちこちで紛争が絶えることなく、飢えてなくなる子どもの数も増えることはあっても減ることはありません。貧富の差は開くばかりです。

先日、中村哲さんの箕面での講演会の記録「水と緑で平和を創る」という小冊子を読み返し、2015年

の時点で、中村哲さんはすでにこれからの社会を予測されていたのだとあらためて彼の偉大さを再認識しました。

医師である彼は「100の診療所より1本の用水路を」という考えのもと、アフガニスタンの干ばつ地帯を緑の農地に変えていったのです。彼の郷里の福岡の山田堰という技術を後々現地の人でメンテナンスができるようにあえて導入したのです。江戸時代の日本の技術がアフガンで生きているのです。今あらためてその発想の柔軟さに脱帽です。

### 使い捨て社会からの脱却

日本は明治維新以降、文明開化の旗のもと西洋の科学技術や文化を取り入れ、「西洋に追いつけ、追い越せ」と躍起になって欧米をまねてきましたが、日本にあった自給自足の知恵をもっと見直すべきではないでしょうか？ 菜の花から油をとり、エネルギー源として照明に使ったり、水車で搾油したり、自然の力を活かし、地域資源を循環させる技を鎖国時代の中で磨いたのでしょう。

「自給自足」や「地産地消」が当たり前だった日本の社会から明治以降、大きく変わりました。今やグローバルな社会の中で、「大量生産、大量消費の生活」を当たり前のように享受してきた私たち。「より安く、より便利な生活」が何をもたらしたか、食料自給率が37%という今の日本社会の現実を見つめ、自立した国として、また持続可能な社会を築くために今何が必要かを考える時ではないでしょうか。

日本に古くからあった「結い」(沖縄では「ゆいまーる」)という仕組みは住民自治の基本です。

今こそ歴史に学ぶ必要があると思います。

福岡県 山田堰



QRコードから山田堰の動画が  
ご覧いただけます  
(日経電子版 2015/10/10)

